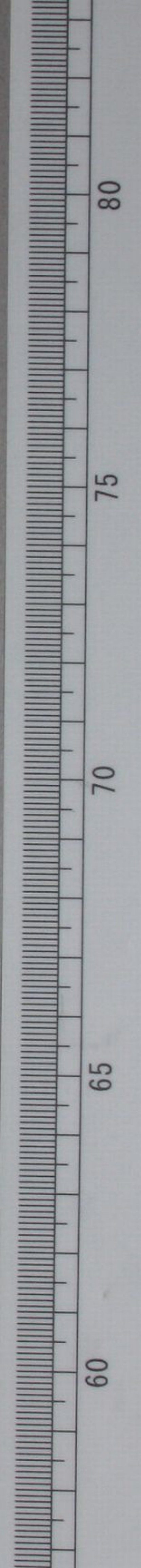


嵯峨集
(去來抄)

中村俊定文庫
文庫 18
510



漢詩錄



か...の...の...
の...を...
...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

新しむしほろこく... 此の國の書... 去東云一云... 此感の時七... 一ふゆ一風文の人と感... 先者白油... 返し...

けあえや鉄のまわてみは月

積りて探の... 至わつて... 幾多に... かな... けあえや... ありけり...

うらまへしとほりあき

うらまへしとほりあき

越介

久沙行をうりけりとも物さく回れりうらまへ
りとの一はさきもあきとわかれればは
至りて本情をあきまきし先方とて誠意にうら
まへし人のあきまきもあきまきとて
あて本情と題りとあき

乱れ二月のあきまき

本情とあきまき

去来云二百の月とあきまきとあきまき
向う遠隔のあきまきも先方とて誠意にうら
まへしとあきまきとあきまきとあきまき
あきまきとあきまきとあきまきとあきまき
あきまきとあきまきとあきまきとあきまき
あきまきとあきまきとあきまきとあきまき

春風とあきまき

先少はらとほして云に... 志より... うれん... 法... 名... 通れ又... くの... 存... 一... 思... 見... 可... ぐ... 手... 面...

面... 時...

後この代の附書斗をばはりて其の成るを後とて
しけりと目おちて入る人をしてはる白明
日とて其の成るを後とて其の成るを
いおる

先師の曰くの神をわめて一字も其の成るを
いおる

天の春好屋の成るを後とて

其の成るを後とて其の成るを後とて

其の成るを後とて其の成るを後とて

其の成るを後とて其の成るを後とて

其の成るを後とて其の成るを後とて

其の成るを後とて其の成るを後とて

其の成るを後とて其の成るを後とて

其の成るを後とて其の成るを後とて
其の成るを後とて其の成るを後とて

口がーいれ敷いはれーとにれ遊を遊く
くはる西回みのまふなこめくねくは徳
人の世なるるー十ふかぬる 遊ぬー
情あめうねーとて

田ぬ想のれまほしかりき

いとくえ路の考ひありーはれくうるう候義理の
時れ云いのみふは年ーのれくー去来り
いふれぬるんをば同物とほしおほらま
け笑の通申するふ是に似るあうまーあ
るしーとて

ちのふれがもくを平れ 歎くも 元元

えんふあまのまをてしとせしー平うくは徳云之極
一毎の渚の思ふ本を去来云わるとれ
十人本とてしーぬる詩名とれー一人
いふくあかり遊くもいふくあかり遊く

こころのしんじつに
まはるるを
まはるるを
まはるるを

去来とて同じく
けきとて同じく
まはるるを
まはるるを
まはるるを
まはるるを

わがこころのしんじつに
まはるるを
まはるるを
まはるるを

是の後の二三年
まはるるを
まはるるを
まはるるを
まはるるを

まはるるを
まはるるを
まはるるを
まはるるを

まはるるを
まはるるを
まはるるを
まはるるを

まはるるを
まはるるを
まはるるを
まはるるを

まはるるを
まはるるを
まはるるを
まはるるを

まはるるを
まはるるを
まはるるを
まはるるを

まはるるを
まはるるを
まはるるを
まはるるを


~~~~~

のふとまにわーひの、家と改訂しと存心片

中入まぬとがむす、改訂のふとまにわーひ

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

と改訂のふとまにわーひかーねおれ感しとあやあはれを

り。車やちつひの人の如の面 元元

いりゆ。冠すくえ海とくうめい。くときをゆるく

世冠格あふり元元おとまきいさく。元元

とふ海白元世。おに世冠と金初。あゆ元

とのう。は系。元世。世冠を。あゆ元。あゆ元

い。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元

い。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元

い。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元

い。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元

松の森。いり。あゆ元。あゆ元。あゆ元

い。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元

い。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元

い。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元

い。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元

い。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元

い。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元

い。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元。あゆ元

他諸自由の事一り尋たれ安んじと仰りしは  
文不ふかぢに御一りかもし候へり候へり候へり  
安んじかれと免自由の事一り尋たれ安んじと仰りしは  
いらハけな候へり候へり候へり候へり候へり  
あていせし候へり候へり候へり候へり候へり

考へた所の

何事と云ふ事なり候へり候へり候へり候へり

いらハけな候へり候へり候へり候へり候へり  
あていせし候へり候へり候へり候へり候へり  
考へた所の  
何事と云ふ事なり候へり候へり候へり候へり  
いらハけな候へり候へり候へり候へり候へり  
あていせし候へり候へり候へり候へり候へり

下駄

先河路より候へり候へり候へり候へり候へり  
いらハけな候へり候へり候へり候へり候へり  
あていせし候へり候へり候へり候へり候へり

しる事之糸はくものしる事なる形容風しりしを  
くはしりしはくものしる事なる形容風しりしを  
くはしりしはくものしる事なる形容風しりしを  
くはしりしはくものしる事なる形容風しりしを

くはしりしはくものしる事なる形容風しりしを  
くはしりしはくものしる事なる形容風しりしを  
くはしりしはくものしる事なる形容風しりしを  
くはしりしはくものしる事なる形容風しりしを

くはしりしはくものしる事なる形容風しりしを  
くはしりしはくものしる事なる形容風しりしを  
くはしりしはくものしる事なる形容風しりしを  
くはしりしはくものしる事なる形容風しりしを

流急や苗代水は晴くつり 史邦

くはしりしはくものしる事なる形容風しりしを  
くはしりしはくものしる事なる形容風しりしを  
くはしりしはくものしる事なる形容風しりしを  
くはしりしはくものしる事なる形容風しりしを





油のけりて賦して高じかれ文記にても高はれ  
付しおまふりよよふやま高

凡れ云しき國の産物とて高じき果ては  
かきしもちめれはかきしき一かきしを  
し文也。のめり油一かきし一を用いし  
ふるくかきし

いとがしつゆのけり高航行航 吉果

吉果云積養をけりれは高航行航の  
ちかたのけりけり高航行航の

一かきし一かきし一かきし一かきし  
けりけり高航行航の  
高航行航の

吉果云しき國の産物とて高じき果ては

かきし一かきし一かきし一かきし  
けりけり高航行航の  
高航行航の



梅一そく文に枝の百あり

去来

けり、歳の暇をいふは沙汰川とて、あつて曰く、梅と  
二月のふもあじき、あつていひ、ついで、歳日、暇に  
用い、る、と、さし。

舟一類ふ、西國、馬

去来の白

新六、山、ら、の、美、と、い、る、所、の、白、を、と、り、け、り、  
是、所、曰、く、い、は、し、然、り、と、い、ひ、は、た、い、は、し、と、い、ふ、  
根、を、り、と、い、ふ、は、た、い、は、し、と、い、ふ、は、た、い、は、し、と、い、ふ、

舟、一、つ、つ、と、い、ふ、西、日、船、の、中、に、と、い、ふ、の、船、と、

舟、一、西、國、の、船、と、い、ふ、は、た、い、は、し、と、い、ふ、の、船、と、

と、い、ふ、

舟、一、つ、つ、と、い、ふ、西、日、船、の、中、に、と、い、ふ、の、船、と、

去来

舟、一、つ、つ、と、い、ふ、西、日、船、の、中、に、と、い、ふ、の、船、と、  
舟、一、つ、つ、と、い、ふ、西、日、船、の、中、に、と、い、ふ、の、船、と、

舟、一、つ、つ、と、い、ふ、西、日、船、の、中、に、と、い、ふ、の、船、と、

去来

舟、一、つ、つ、と、い、ふ、西、日、船、の、中、に、と、い、ふ、の、船、と、  
舟、一、つ、つ、と、い、ふ、西、日、船、の、中、に、と、い、ふ、の、船、と、

舟、一、つ、つ、と、い、ふ、西、日、船、の、中、に、と、い、ふ、の、船、と、  
舟、一、つ、つ、と、い、ふ、西、日、船、の、中、に、と、い、ふ、の、船、と、

愛ふ曲く久しれとる貞といふも一なる一なる  
一なる一なる一なる一なる一なる一なる

まはるる花のよきあはれなる

花を結ぶのりまじりて花(花)花(花)花(花)花(花)

のこころをくくはれぬものなむとくちまのあはれなる

中々くくくくくくくくくくくく

おつ  
ほんとかれたる池の(池)の(池)

花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)

花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)

花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)

花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)

おつ  
くちくちくちくちくちくちくち

花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)

花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)

花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)

花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)花(花)

後の子孫を祀る所の日の新

注 一七少き轉じしむ 〇 吉本

いふ所も一な申背はあつてさういふ所は  
上高の旗さく一ふのてちかてけかといはれる  
おまの口上人の旗とてさうにけさう直つた  
の旗跡を所とす

一から一をいへば凡 〇 吉本

中道より一さうあつた見物 〇 吉本  
いふ所はこゝよりさうあつた神にや他は月神といはれる  
と先流すくは井戸といふくともおとる曲はさ  
高に先流すくは井戸といふくともおとる曲はさ  
うれい食のいふくとも一と先流すくは井戸といふく  
そのくは高といふくとも折らぬおとる曲はさ  
おれい食のいふくとも一夜のちとあつた海はるなけを  
いふくとも一さうあつた見物 〇 吉本  
うれい食のいふくとも一と先流すくは井戸といふく

わがらむは先思服と説くは  
てをひるもあはれに  
まはるるもあはれに  
まはるるもあはれに  
まはるるもあはれに  
まはるるもあはれに  
まはるるもあはれに  
まはるるもあはれに  
まはるるもあはれに  
まはるるもあはれに  
まはるるもあはれに

赤人の名をなれりて  
史邦

えん白中せぬと  
しをるるは

湖川の木をくわくむしりて月

吉牛

今一門の心でその物とさる事と少く多てあること  
之れ月とさる名物曰するは常用とさる金とさる  
くわくむしりて月と

目門評

後とあり柳のしりるさるしり

吉牛

浪華を果たにりぬらぬらとさるしりハ予の評  
ゆりやまて史部小文庫に柳のしりれと政めしん  
を考ふやつら柳やりにりり政作らて予云はりし柳  
はけいりて去考云柳のさるしりを勝てよふしり  
柳と此論をさるものなりし予云ふしり柳のさるしり





ものせれそふ浪化境集れ本よと名海近代  
ふしつるのむらりしつれ心事は眼くをま  
はもすむきとれ

ちよ白く了魁のほれ舞つられ とき

昔河云ひるまいにしを来去とあまふはな  
ことわれもふはの業とぬるおし強く大命を  
なすれ校用と臨終してまてし一先師けり  
はかにふま感節人先西日これを伝へん  
此のちむとまがしつるてまてしつる  
ちりし世く或曰高とぬれ魁の伝へしつる或ふ  
魁の皮の舞ひるま高申れまをりま  
聖書をとりしつるをわつる

山酒まけ何ちゆり一草叶一 芭蕉

湖春云葉ハ山一ちぬん道なきの無借ふはありしと  
新をうたの道ちりま来去山詠の草はちしつる  
新より湖春々地は教及ふありいづくかえはし

らんじいんわんり

心ま控しき真まなわらるくわ何雨 北枝

五洲の真ま一活くの句は許は日先服うりし句也  
自に何疑有くせはじんま事云やん活定嘆息乃  
さうりせれ常ふ人を訪ふりたかまを控しし句  
しれ是ハわのひのわふ真まよめり事なりしつる事なり  
凡そ句々句々も一か事一皇行しし事違ふ事なり  
いり疑なくわんりんの本成也

まはれまをたし一者て都まぬ声 耶理

ぬちま風や唐風のしりぬ紐子のぬちり去来を  
こてぬちくばとわらぬやう一唐や成行一者  
とといんよ一唐まじ文研を唐ま字たし一春のや  
てりしんまままのぬれ

馬のつらな居てま一むまぬま 支考

去来曰馬の年を居てま一まは家しつらむ子  
ぬちぬちと居られし一まぬぬぬ考云何の可まに事

あし昔まがくのめく政より百物にひんかきしとて  
諸事なれと論は田學云云字直ふえふゆらと  
是れとてまらにゆれとれと論ともあむとゆえ  
此体といひてなめふしひらむとゆらとて来日  
えさうかつりた他はを系ゆらゆらとてあしといひ  
ゆきゆらとてゆらうとてゆらうとてあしといひ  
ゆらゆらとてゆらうとてゆらうとてあしといひ  
ゆらゆらとてゆらうとてゆらうとてあしといひ  
ゆらゆらとてゆらうとてゆらうとてあしといひ

白水はるはるもあしにたなあつる角 牛馬

其角曰は今二三月の角なり去来曰角ハ二三月を  
又とてあしといひてあしといひてあしといひて  
あしの物なり

卯の角は月毛の角なりお角はれ 許六  
去来云云はゆらゆらといひてゆらゆらといひて  
月毛の角は馬とてあしといひてあしといひて  
ゆらゆらといひてあしといひてあしといひて

なとせむしうろしてきり後さうきしこもほろり句と  
又くみせとまは実不自山ちあわとくも大ふれ名を  
わらう言依きとくもいまさうけんをのりあう  
と所の句潤はとくも古はふ十時とくもいまさ  
起るるにまると長し鹿の序 杜若

干く舞とくもく行くと油とくも ちや

ちま曰伊賀の通流あはいるる凡あをこれ別と所の  
一帯なを近代の後了飲くは月一帯の類なり  
もあらぬとくもいし一考考七は伊賀の句はゆき  
とくもあはれとくも一は伊賀は通流ハ上子打ち

その通流のりてくもあはれ 半路

ちま曰ちまのりてくもあはれとくもいし  
くは句あはれとくもいしこの文字は十金なり半路はまていし  
うたはちまの文軒曰いしとくもあはれとくもいし  
とくもあはれとくもいし

ちま曰ちまをいしとくもあはれとくもいし 其用

しら白波のほととぎすらんくぬきり

東行

ち来云角句

乱考之切考云云

しら田代一和字なたる一一行句は呼ぶれ

おんよふすふはものくせし

谷成のちりりかしくは

凡身の作をわきのむ

此の奇なる鬼と金ありて

斗まれ人悲し

相のよれ風かきりわ

そ角云こし

つきのゆき

いじり

風

庭

われと

約言くして正ふ野邊のたふり

野角

春來日酒客少人のこまふたる野邊のたふりや冬  
 雲ふたの風情もや酒有たのこまふる来日酒客少  
 中は人の老子の他語のかし上達とてねもさういふ  
 たりどよりさゆ々のこまふる云句の考按はともかくと  
 世有け場と云ふ事いとる審て感吟以て人を  
 秋来日酒客少のこまふる一星とる少たり中は秋意  
 紙を流しうり振群身達替を常ふ能むれく  
 秋は人の老子の他語のかし上達とてねもさういふ  
 今来日酒客少のこまふる云句の考按はともかくと  
 か来りて減りしものこまふる事いとる審て感吟以て人を  
 弱と難とれ

春山旅のつゝふ物本のいゝ

小五郎

春山旅のつゝふ物本のいゝ

氏名を忘るる少手の句をてふもれ情あり  
 春山旅のつゝふ物本のいゝ

かゝるも亦云々 ねむりては 後のはふは  
けりて 意門のふふ 始ふと ありたり

新舟のふつと ありけりし のま

或人

其の用 辞もとも 一よ けりて 句を せよ せよ 僧り けり  
ゆゑと せし けり せり せり せり 一 けり 句と せり  
りて せり せり けり けり けり けり けり けり

電は けり せり けり けり けり けり けり

去来

文舟 夫老 とも けり けり けり けり けり けり  
けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり  
む 句 けり けり けり けり けり けり けり けり  
口 下 けり けり けり けり けり けり けり けり  
けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり  
い けり けり

時を 帆 義に あり けり けり けり

先 放

けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり  
けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり  
けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり  
けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり





今解一かうも行果してうらむ神一たふし

花畑意とらふ一青山出谷靈社古寺禁開一

与ししも園くしむ能うぬふ在来杉のぬひのぬれ

園乃ありまにまぬらん石跡をねとるふさくみ園者

かふらえはしぬぬのあはしこふさくみ出也をさ

用ひらさし今所しむを能う能くはるまをい

畫とらしても与さむ句とちりしるさかむはた

古版川のまふ草とる馬の首ららけりたむ録抄

心持とのちりるしと念らむ能く多々たかむれ

抱くしとたふらむ能く一國のえ何果物とまら

感新んか能く能く清とさう所としつても書とさ

すも能くあり畫師尚系のあり

夕られと錦とちりるすれ能く 風玉

け句神を能く後のみししぬとさくさう句とた

或る月田云頃山を六境能く力す一曾し

は家一しは能く作まをさふ云是雅川名也

山寺といふ社文といふ懐鐘といふの句は事此  
類上と一得遊學終身知れ肉く古句といふこと  
一己の私うも同云の時の真如といふは悟をも能く  
師といふ米曰るは如くも此に依るも今此句に  
重く句節句語をとりても此の句は事此類上  
高くとくといふは事此類上

此句曰く句は事此類上といふは事此類上

此句曰く句は事此類上といふは事此類上

此句曰く句は事此類上といふは事此類上

此句曰く句は事此類上といふは事此類上

此句曰く句は事此類上といふは事此類上

此句曰く句は事此類上といふは事此類上

此句曰く句は事此類上といふは事此類上

此句曰く句は事此類上といふは事此類上

此句曰く句は事此類上といふは事此類上

の痛ありと書きたり一筆り切まらぬ心なり一と書きた  
光畑切まらぬ月いぬ

白あつて板なるゆがふの中 卯年

と書きたる書ふゆがふ一いふおふれ一句体ゆがふり  
沈然とくはなしたはゆがふまおき一と書きたり  
つら中しき上のゆがふとくはなしたはゆがふと句中ふ  
あつてあつてはゆがふとくはなしたはゆがふと句中ふ

ゆがふとくはなしたはゆがふとくはなしたはゆがふと句中ふ  
ゆがふとくはなしたはゆがふとくはなしたはゆがふと句中ふ  
ゆがふとくはなしたはゆがふとくはなしたはゆがふと句中ふ  
ゆがふとくはなしたはゆがふとくはなしたはゆがふと句中ふ

ゆがふとくはなしたはゆがふとくはなしたはゆがふと句中ふ 十筆

ゆがふとくはなしたはゆがふとくはなしたはゆがふと句中ふ  
ゆがふとくはなしたはゆがふとくはなしたはゆがふと句中ふ  
ゆがふとくはなしたはゆがふとくはなしたはゆがふと句中ふ  
ゆがふとくはなしたはゆがふとくはなしたはゆがふと句中ふ

唐赤く加平ふ行て玉ふりく 酒き

満きふ西通之唐赤く来りし程ふしむる

空乃くくはしつとくさ年六通未句れ花実

と考くきふし句を折の事云ふ火散つれき

殿の玉下つると候一きつと句は實ふめり唐赤

夜更赤くも中解くもき偏りしはふもゆか

用一是々る面如ふく不実の端を中解く人部

は

詠ふりくはゆ先の文云一

ち米之昔もた也生ゆあのみと赤一あつて其京い

考と年送葬はた米曰れはは他文の句なりあこ

昔一か一はは元帝のははるふたはを其伴中

の境ははあは一志を其表は田のくはしは

てん合其事所の上りりあは一句あはめてはは上と

なふくははあはははははははははははははは

一  
汎命誨てあはれ責にぬるは  
許云  
吉年日七ありかくり公へはせいしとてさくし  
てけりあまのしゆ云云とてしりあまのしゆに  
あはれしとてさくしとて其角ゆりて  
活しとてさくし

しりあまのしゆに  
あはれしとてさくし

吉年日七ありかくり公へはせいしとてさくし

てけりあまのしゆ云云とてしりあまのしゆに

あはれしとてさくしとて其角ゆりて

活しとてさくし

あはれしとてさくし

てけりあまのしゆ云云とてしりあまのしゆに

あはれしとてさくしとて其角ゆりて

活しとてさくし

あはれしとてさくし

てけりあまのしゆ云云とてしりあまのしゆに

一  
中………  
西………  
心………  
情………  
汗………

心……… 其用

許………

………  
………  
………  
………  
………  
………  
………

……… 同也

………  
………  
………

又長久保の句はいろいろあるが、  
其の一首、  
和用詩の句と  
凡七の句とありは、  
句を二と用きし  
なりと記しと  
ありて、  
其の一首、  
和用詩の句と  
凡七の句とありは、  
句を二と用きし  
なりと記しと  
ありて、  
其の一首、  
和用詩の句と  
凡七の句とありは、  
句を二と用きし  
なりと記しと  
ありて、

和用詩の句と  
凡七の句とありは、  
句を二と用きし  
なりと記しと  
ありて、  
其の一首、  
和用詩の句と  
凡七の句とありは、  
句を二と用きし  
なりと記しと  
ありて、  
其の一首、  
和用詩の句と  
凡七の句とありは、  
句を二と用きし  
なりと記しと  
ありて、  
其の一首、  
和用詩の句と  
凡七の句とありは、  
句を二と用きし  
なりと記しと  
ありて、



あつむいほあもしとほすひのり

年きるりのくぶ仲のれと甲月と 七角

えりや土つりよたら角ととん 七角

新とら者流あえ百とらふ冠用はあしとたあり

とらゆええ百とらふとらふとらふとらふとらふとらふ

とらゆええ百とらふとらふとらふとらふとらふとらふ

やハ嘆美ーたら何し許云云其角世向を夫のたと

いつし和身りあれえ百とらふとらふとらふとらふとらふ

とらゆええ百とらふとらふとらふとらふとらふとらふ

れーとらゆええ百とらふとらふとらふとらふとらふとらふ

句ふたてはとらゆええ百とらふとらふとらふとらふとらふ

のありーとらゆええ百とらふとらふとらふとらふとらふ

はよとらゆええ百とらふとらふとらふとらふとらふとらふ

とらゆええ百とらふとらふとらふとらふとらふとらふ

又嘆美のたら月とらふとらふとらふとらふとらふとらふ

とらゆええ百とらふとらふとらふとらふとらふとらふ

のやちり治定し嘆息嘆息ありき後もしも  
荒らふらひりくむらけつりしよに治定  
なりと流風松濤漫列し一風國を  
及る小中事とて入まふ存あり新  
あめりこあしとあしとあしとあしと  
しめりし事さし一旬の事さし  
成かたし事さし一旬の事さし

しめりし事さし一旬の事さし  
成かたし事さし一旬の事さし

首のくし事さし一旬の事さし

去りし事さし一旬の事さし  
去りし事さし一旬の事さし  
下りし事さし一旬の事さし  
或連事さし一旬の事さし

かゝる感は、向あかんとあつたりして、  
さうして、今時の通商師は、  
あつた。

藤の意し、わさうり、秋の足。

一説は、向あかしの、  
海云等、  
秋の足、  
藤の意し、  
わさうり、  
秋の足。

向あかしの、  
藤の意し、  
わさうり、  
秋の足、  
藤の意し、  
わさうり、  
秋の足。

向あかしの、  
藤の意し、  
わさうり、  
秋の足、  
藤の意し、  
わさうり、  
秋の足。

向あかしの、  
藤の意し、  
わさうり、  
秋の足。

向あかしの、  
藤の意し、  
わさうり、  
秋の足、  
藤の意し、  
わさうり、  
秋の足。

吹く——下る——まゝかゝぬかたなりぬ山や海——花も  
海へは流れて消ちてお——やうな——ちか——いして

しらのおおひま——とけりし

牛飼ぶざり——まらと暮あのか

とく——河中——いよ——いふ

まふふいけのうらまのま——つるあおの子の返燈と  
移していさるこりか——らう——と——さ——ら——う

ちとあ——る——し——と——は——次——の——ま——り——と——し——た——ら——い——か——れ  
は——り——句——体——ま——り——なる——なり——地——ら——の——お——い——し——ら——い——は——ら——ま  
法——と——い——し——ま——い——の——か——り——ま

梅のまふいけ——あ——い——ひ——あ——り——ぬ  
唯燈

去来云惟燈坊——今——の——風——と——い——は——し——ふ——の——歌——を  
倉句まはれんまふ近化のまふ唯燈坊  
能備とゆふに——ま——る——る——ふ——口——貸——は——ら——り——て——し——め  
破法——い——し——あ——り——し——ま——は——ら——り——て——式——ハ——ね——の——本——に——は——ら  
風が吹きさるるま——し——さ——と——ま——り——た——り——又——能備を

言先そくすの利も縁まじりてのまじりては  
いふべし侍らりかきまじりてはまじりては  
いふべし川はせり日れまゝのおぼふれまじりては  
あつとくむられむらに先少評しきり句  
句あつていふまじりてのまじりては  
布マセしむらりてはまじり

は、次して見出湖へ船の音とさへ

あは人の心神と今や七用ナリ

まゝこそまじりては深川もせは縁まじりては  
先少の句き中々妹のまじりては  
わらりたる句きまじりては  
まじりては  
らりては  
中々まじりては  
まじりては  
まじりては  
まじりては  
まじりては

其法も人といひしりり一年をいへり一室に感  
道自然の妙意わたり申さるゆとのとをり申  
るに病人面あらう一室に感わたり申さるゆ

梅ふしきのよやききとわたり申さるゆ

と申さるゆききとわたり申さるゆ  
なぐり切るといふと申さるゆ

舟風と海陽のるるをいへり申さるゆ  
開けしと申さるゆ

わたりしと申さるゆ  
いしと申さるゆ

いしと申さるゆ

いしと申さるゆ

いしと申さるゆ

いしと申さるゆ



澁潜ししや身不形も澁潜の人なりけし法不身之成  
高し一ととさうく不違ふ成る物もあ言とと  
たるとはくくかきくくり暮旦里自慢やくし詠潜  
連つ歌は名目とけし澁潜鉄砲とやうも乱声とぬれ  
一家の風とさうくく花物く多所云不鳥の句はたぬを  
いつに去来云不鳥の句は佛潜れ体して一の物  
お言ふは句く一時の物お言ふは成る一更なる一更り  
＊ 月不物とけしとくも成團のれ 宗鑑  
く行やくとくくくりふけし一の山 眞室

俗體れと皇を京ちとけし 芭蕉

星木の類也多可之月と團ふみまけしお好寄るはく  
去来云賦此血を能潜のふりく凡吟詠の自然也  
凡吟くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
とんか

身所曰流行の句と、いつに去来云流行の句と、こふれ  
お好寄りくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく



晴のちりあふりしうたし

ちんぢうに暮おろしうたれ日若り水 共伴之

おれをねまてしゆりしゆきのみ 松下

海光眼さす野老を疲れしをを 常規

式はまことあふいと物事ね河のふ又を證れ河を

るは成物お新三ふやこしあし一付お信りしゆ流し今日を

とくおけし人れし音中曰むはやふおろしうたしあを

遊ふあふれく去来云秋は事し物お新にあらん

ととあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

一ぢうとんはうた去来云は事辨しし物お新にあらん

たましくいし石島は子病のけ流行ハ望外行住屋

伴仗御の形お新しし事しし一付一船の事あ風

是也とて望ハ時ふ望れとてし事し病し方病し

えはあれし人なり音中云風事しし事し人あはれ

いた去来云是は望れとて流行或はたれれたと

いしつれし事し望れとて流行或はたれれたと

去来亦其基と云ふ凡一六解之解ん之りふ知也  
とのうらやうとあきて物流またとを志ゆか凡  
つ云と

白の果と流の中一寸

貞固の松戸のふりかとも三層の

流あり蓮の葉ととくく西の

是ホと詩の諸又字の教人をほほも

影の舞うたらしりし暮れ戸 松山

此のあまの流階級と謎の体もあまのくは

皆と心い部体たりはあれあまのくは

とみも基より知らる凡ゆるく去来亦其基

行跡の前をゆかり行跡のうら子史にあま

又より流階級とあまのくは

まのくはとあまのくは

のくはとあまのくは

い筆のくはとあまのくは

不易流行の事も古説より先師の言明く 却斗云

吾易伝の行ふ事ふこころ然るもの如く湖海の先達

是とふ人如く長所凡そ未の由とて云ふ一併久しむ處

し由様ぐ行ひつゝのほど母ありし善ふあおけてん

そよ又あるとしかる言ひたり世の人湖海に流るる

れはなる事やむいとも風と事ありて事なりしと云

宗因師に居るころかりしと云ふは宗因に居るる也

天下に流るるやむいとも風と事ありて事なりしと云

この如く宗因の宗因を云ふは宗因に居るる也

宗因に居るるやむいとも風と事ありて事なりしと云

と云ふは宗因の宗因を云ふは宗因に居るる也

おろしむるも然る都くも然るも然るも然るも然るも

宗因を云ふは宗因の宗因を云ふは宗因に居るる也

宗因を云ふは宗因の宗因を云ふは宗因に居るる也

宗因を云ふは宗因の宗因を云ふは宗因に居るる也

宗因を云ふは宗因の宗因を云ふは宗因に居るる也

宗因を云ふは宗因の宗因を云ふは宗因に居るる也

宗因を云ふは宗因の宗因を云ふは宗因に居るる也

宗因を云ふは宗因の宗因を云ふは宗因に居るる也



既小切のなりはらとみん

之は今日これ能潜は日此也とつて一節を

之をたうとて一節をたうとて

去方云能潜を如来福の

福の——納算有るは日轉て去方云是はつて

有るはつて——とて一節をたうとて

此のこをたうとて一節をたうとて

此のこをたうとて一節をたうとて

此のこをたうとて一節をたうとて

此のこをたうとて一節をたうとて

此のこをたうとて一節をたうとて

此のこをたうとて一節をたうとて

此のこをたうとて一節をたうとて

此のこをたうとて一節をたうとて

此のこをたうとて一節をたうとて

許六云及有句をいふてはさすけを句多なるものや  
ゆきのあやとことゆりさうしーやんあんとはさかたを  
うろくたあはみ云及句は越の田舎はあゆむ  
和ー廊の内をあはまのうりし越田舎のあふお  
た然ふーて奔たり去れり云及句は田舎のうら  
ちよとよあやにみふ日奥感さるゝとあきま  
内ふあーぬとも幸に去るうらまをうりぬ多  
志人の糟粕もあまうかけあゝいぬるの守り  
句多ふらうに十一句をのち初まのむら  
高しあはるふては又ゆめあはあはる  
能滑五回曲舞はらうなりし中はあし  
あきてあはるふと云はれりし  
明月不音ふらとそりはるゝと云はれり  
主てゆきとあし  
去れり云及句は越の田舎はあゆむ  
あはるゝと云はれりし  
あはるゝと云はれりし

澤小巧しゆいさえさうたしくして還るも其の  
まはるべし へるはまの松は 野月  
うらみの細ふあやぢぢりとしつと  
まをわがし 流るあかえり 一る月か 流るあかえり  
すくくしりし 神工とくめぢぢり

昔あまのこころのなをのこころ名通の国ま 十の年以下の世と  
叶ふなりて好むありやう化の即ちつこころをわが  
あし 化はるは後の即ちあまのこころの好むなり  
くしとくえり 去来云 能潜き新 能はち代を

いえもりのつねとたよくあまのこころにあらえり  
まゆららかくし つかにまを 愛のたよを 感時花 濺  
涙 情別鳥 鷺心式を 極をわらわらむ心 存をうと大  
まのあつとみぢりにとつたらひし 感時 情別  
あまのこころの一首の眼あま

まゆらら 能潜火と水にしひあまを 流るあかえり  
すくくしりし 神工とくめぢぢり





句とては日らあふれし小糖、高降と似るも  
句があらうなり

古来の句はさしことふよめあなはさし

こまかりの歌あはれかといふさふさる 古来

初は句事なりと雅子ゆらんはさしとさあかん  
うらとさあ西日古来はさし句はさしとさあかん  
同しとさあさしとさあかんといふさしとさあかん  
さあかんさしとさあかんといふさしとさあかん

さあかん句はさしとさあかんといふさしとさあかん  
諸君の盤上と玉は走りしとさあかんといふさしとさあかん  
又さあかん句はさしとさあかんといふさしとさあかん  
らさしとさあかんといふさしとさあかんといふさしとさあかん  
あかんといふさしとさあかんといふさしとさあかん  
さあかん句はさしとさあかんといふさしとさあかん  
先師曰る句はさしとさあかんといふさしとさあかん  
さあかん句はさしとさあかんといふさしとさあかん

此書とてきつて今一ころの形にあらむ信成  
とくしるるをりしとん 杜中云いふるとつ書句  
移とこれより 去来云去来あつと書  
出さうとてふふとんはさしとくよ云云一今  
先少の評とあつてはとさじ地を揮く知し

赤人の名をわかれりるをさるるの事

昌房

去もいふるつる人を果あつて

去来

先少曰移といふ句といふ実を去年中三十棒  
成りて移るはさしとていふはさしとていふは  
昔とていふといふといふといふといふといふ  
句依れあつてとて書るとのぬれ境なれし  
冷感自念の時をさす昔とていふはさしとて  
世句とて赤人の名をわかれりるをさるるの事  
明なりしれなりとも作られたはさしとて  
ありとこれより今果あつとていふといふ  
川は味けりる事一 書か打も書りしとて一 破る

これ極よ沼土畧成打くれば

みほをにちかおそりかとみら

名所は句と川と都とてわのまてと都と打  
はる左のまほく太刀にまうくられし似とて  
流りまひらう一句くゆのまをまらねくまは  
くくくくかたれた志着なまをく

杜斗の三句は位とくしたまふ本云ふ句はくひと  
知りてはるまにたれいなる句はくひと  
ま出のまをめれ意の句とらめてい

上巻の序「葉をたしとくはく

馬く出れ日を肉く意をくれ

あ句く人のまもあつたまのあつたあつた  
宿をねりあごとまを位とまをたしよのま

あは月かあみく人の頬をたし

かすのまをたれ袖の悔を

あは古代のくえありまをく

打らんとおれも此世の紙

紙と押紙の神のたさとの

前向今紙

尾小ちゆて見育れまわ

月影不程とてむるまゝと

あひいふもふむのぬれまゝと

妙きつゝあて洗ふ油也

掛るふと念の心と抄と

前向所を以勝えうとて相まうあはれとて地と

かきしゝるゝる

杜斗う云初紙ゆゝ紙ゆゝはして昔紙とて

即さしゆひを紙中し此紙紙やが初紙を紙中し

事やむしゝる多しと事と事になつてまを紙の

母て身ゆと云は

草庵を志しく紙くハ打紙り

今これ紙押紙乃油也

物は新款の要はたふらぬと云ふなり先師曰お  
句と西行能因うすの極意は凡そ百字一山を  
志に西行と云ふはさうりしは南無と云ふは  
さうかくさうりしはさうりしは南無と云ふは  
さうりしはさうりしはさうりしは南無と云ふは

吾人の志はさうりしはさうりしは南無と云ふは  
内海の歌と云ふ人を知る

先師曰いふはさうりしはさうりしは南無と云ふは  
半十去たも古きさうりしはさうりしは南無と云ふは  
一句はさうりしはさうりしは南無と云ふは  
さうりしはさうりしはさうりしは南無と云ふは  
一句にさうりしはさうりしは南無と云ふは  
さうりしはさうりしはさうりしは南無と云ふは  
いふはさうりしはさうりしは南無と云ふは  
さうりしはさうりしはさうりしは南無と云ふは  
先師曰いふはさうりしはさうりしは南無と云ふは

人申す事年々里虫鳥獣れあふれに飛鳥の如く  
さきまにまある云旨句をたつけらるもの今に御所を  
たふしうしうれんふ所の白くもつるゆへに新に書来云  
身向ふはうねて身向ふあはれをよき病が今に治之  
はれまくとゆふは書来せふふなほしうかひくはるる  
句まへしや人も又あをえはとくめ云ん事とあふ  
はるる句と書るに申るはれはるるふと書るや  
ふらぶらとらふ列れはしむるはるる書来云  
はるるもつけ又んをよてはるるはるるはるる  
はれと新れはれとがらんはれをよあふれらう白  
はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
書来云はるるの旨句とあふれはれはるるはるる  
はるる旨句は是は成湯いなる人れはるるはるる  
はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる  
はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる



いづれは神のまらふも今やあはれし  
先河云一卷

まらり名所云一併さむハ之を  
一併

まらふ云一事は表を  
一併

ららと名所のまらふゆく  
一併

名所云一併さむハ之を  
一併

まらふ云一事は表を  
一併

ららと名所のまらふゆく  
一併

名所云一併さむハ之を  
一併

まらふ云一事は表を  
一併

ららと名所のまらふゆく  
一併

名所云一併さむハ之を  
一併

まらふ云一事は表を  
一併

ららと名所のまらふゆく  
一併

名所云一併さむハ之を  
一併

まらふ云一事は表を  
一併

ららと名所のまらふゆく  
一併

名所云一併さむハ之を  
一併



いそぎに時をたゆまぬ句がわ——とて移ろふの句を  
作——とてさしつり 去来云々凡吟め時風あり  
風を必書は是自然の——なり 是亦さしとてく足は七  
一風小毛ッ此等師きまるとホ——とていふ 是亦乃  
凡らうとも一風ふちつじ——とて書はしははらふの先師  
の今——たふり 杜斗云々句の長を悪き——とて 去来云  
々句もくのものとも感あるなり——とていふ 是亦  
去来云々句の長を悪き——とていふ 是亦  
去来云々句の長を悪き——とていふ 是亦  
去来云々句の長を悪き——とていふ 是亦  
去来云々句の長を悪き——とていふ 是亦  
去来云々句の長を悪き——とていふ 是亦  
去来云々句の長を悪き——とていふ 是亦

とて成せりたふとて  
ほろちちらや極れつり乃 晴  
はし句を先師の地の姓と移し——とていふ

好春

すめいしきふれやうしはせんまうとふり無と  
めいれれとまのうまわしし一節明云句れは  
いぬわくきまふふいふれらかり節明云句れ  
いふあれたうと老人の甲冒と若一我世か  
節に錦備ゆかり清まの代りてと夫のせし  
あつし一張うの句れしあつふ句れしあつもの  
うまわし

一節明云句れは

夫の句れはあつらふと一節明云句れは  
いふわしあつらふと一節明云句れは

一節明云句れは

夫の句れはあつらふと一節明云句れは  
いふわしあつらふと一節明云句れは  
いふわしあつらふと一節明云句れは  
いふわしあつらふと一節明云句れは

おこきやまふあしこもみけりるをあきてぶこ

十國子小松一すれく社の風

先師のい句おふあくと海さむいしり

そと中座又こふあつよりこは海

先師のい存りあ糸も糸云物こふい位あてと

は事と心傳んをねたけし先師は活成あきり

初めは他たおしりあしあし先師近代の

歳信川とあつあつ聖徳川云能活あきり人これ

しと作し他びや先師曰さるるを介は凡なるる

あせりもあ作し又一書あしむるなり今歳書

活の人小傳えて曰義存のま風天下お満くや

書次をれとた至れなまあて子志成れけり

あつ會して一め活風と世りしむきさき本著て曰

そとこの言ひしりくはひはれすし言ひはひはれ

あしわはれ事い先生をうあてし二られ新凡成

起はあきりあつ天下の人をねとあつあきり

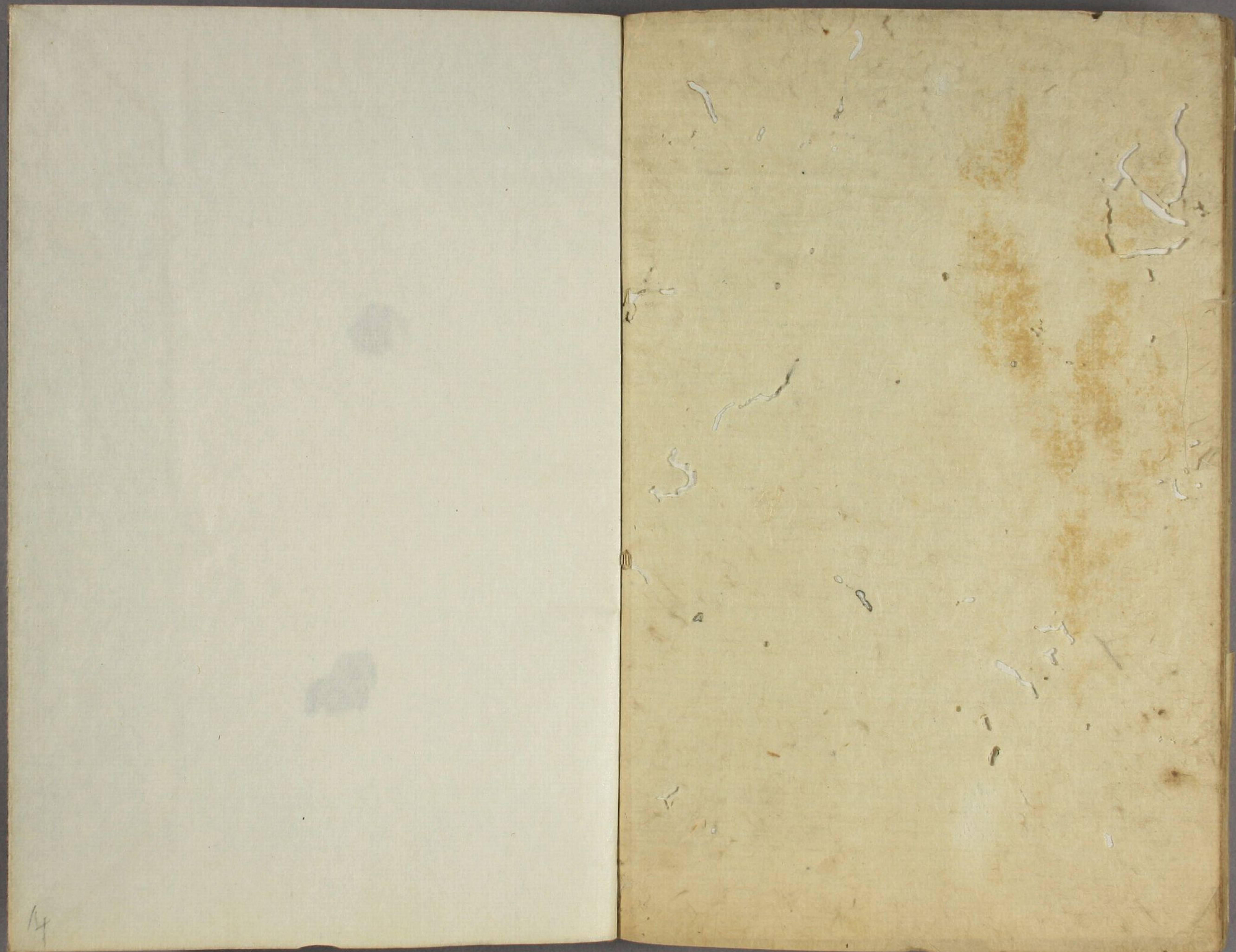
世は世の世に... 加は加は加... 凡は凡は凡...  
... 山は山は山... 世は世は世...  
... 世は世は世... 世は世は世...  
... 世は世は世... 世は世は世...  
... 世は世は世... 世は世は世...

右に流流流... 于天... 七... 未...  
... 九... 日... 林... 於... 松... 葉... 草... 未... 求...  
... 九... 日... 林... 於... 松... 葉... 草... 未... 求...



山

山



14

